



月報だよりの原稿は毎月20日締切、翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。校正をお願いしておりますので、締切日よりなるべく早めにお申込みください。

e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp宛。

なお、原稿も必ずFaxで0422-31-5487までお送りください。

人事公募

標準書式：なるべく、以下の項目に従ってご投稿ください。結果は必ずお知らせください。

1. 募集人員（ポスト・人数など）、2. (1) 所属部門・所属講座、(2) 勤務地、3. 専門分野、4. 職務内容・担当科目、5. (1) 着任時期、(2) 任期、6. 応募資格、7. 提出書類、8. 応募締切・受付期間、9. (1) 提出先、(2) 問合せ先、10. 応募上の注意、11. その他（待遇など）

国立天文台研究教育職員（チリ観測所助教、三鷹勤務）

1. 助教1名
2. (1) 国立天文台チリ観測所 (2) 国立天文台三鷹
3. システム工学，電気または電子工学，または電波天文学
4. 本助教の公募では、システムエンジニアとして、ALMA望遠鏡の性能向上，新規開発，そして技術課題の解決に取り組み、国立天文台チリ観測所や先端技術センターに在籍する研究者・技術者を、リーダーシップをもって牽引する能力と意欲をもった方を求めます。システムエンジニアリングに関する以下に記す業務を担当していただくこととなります。

- ・ALMA望遠鏡の性能バジェットを解析し、技術的課題を鑑みつつ改善の余地を検討することにより、装置性能向上の指針を明らかにする。
- ・ALMA望遠鏡の拡張計画の背景を踏まえ、それを実現するための新規技術を開拓する。
- ・ALMA望遠鏡の観測運用について深く理解し、ALMA望遠鏡の性能を十分に引き出すとともに、さらなる観測性能の向上を実現する。
- ・東アジアが主導するBand 1受信機の開発を推進する。

さらに、ALMA望遠鏡の性能向上や新規開発に関する以下に記すより長期的な開発課題のうち、少なくとも一つ以上の課題を担当していただくこ

とになります。

1. アルマ望遠鏡の広視野化の実現
 2. アルマ望遠鏡のさらなる広帯域化・低雑音化の実現
 3. アルマ望遠鏡のさらなる高分解能化の実現
- なお、上に述べた業務の遂行や開発の推進に加えて、応募者は電波天文観測装置に卓越した知識、経験をもち、国立天文台チリ観測所の主要メンバーとして活躍できる資質をもっていることが期待されます。特に、日本国内や諸外国の関係者（研究者を含む）と良好な協力関係を構築し維持できるコミュニケーション能力や、Face-to-face会議やビデオ会議、電話会議等での科学的・技術的議論ができる英語力は必須です。
5. (1) 決定後なるべく早い時期、(2) なし（定年65歳）。ただし、採用5年目に行われる業績評価の結果によっては他の職種に移っていただく可能性があります。
 6. 関連分野で博士の学位を有するか、またはそれと同等とみなせる方
 7. 以下の書類（英文）をpdfファイルとし、電子メールに添付して送付してください。(1) カバーレター、(2) 履歴書（研究歴も含める：個人としての研究業績のほか、多人数で行った研究・開発プロジェクトの場合は本人が果たした業績を具体的に記入してください）、(3) 研究論文リスト（査読論文とその他を区別し、共著の場合は本人の役割分担を記すこと）、(4) 主要論文3編のpdfコピー、(5) 職務に対する抱負と計画、(6) できるだけ迅速に連絡がとれる連絡先（e-mailアドレス、電話番号）、(7) reference letter 2通以上（応募者からの書類に含めず、letterを依頼した方から直接9. (1) の提出先に応募締切までに届くよう依頼してください）。
 8. 2015年12月17日（木）（日本時間）17時必着
 9. (1) e-mail（応募専用）：apply-alma-assis20151217_AT_ao.ac.jp（_AT_を@で置き換える）メールのSubject欄に”application for Assistant Professor of NAOJ Chile Observatory”と明記し

てください。

(2) 国立天文台チリ観測所長 長谷川哲夫
e-mail: tetsuo.hasegawa_AT_nao.ac.jp (_AT_を@で置き換える)

メールのSubject欄に”question on Assistant Professor of NAOJ Chile Observatory”と明記してください。

10. ・すべての応募書類(上記7.の(1)-(7))はそれぞれpdfファイルに変換し、メールに添付すること。
・pdfファイル作成にあたっては解像度に注意し、あまり容量が大きくなりすぎないようにしてください(メール一通最大10MB程度まで)。
・郵送や直接持参による応募は受け付けません。
・応募書類は本件の選考以外のいかなる目的にも使用しません。
・応募書類が受理されると祝休日を除き3日以内に受理確認のメールをお送りします。それが届かない場合には、apply-alma-assis20151217_AT_nao.ac.jpへ(_AT_を@で置き換える)お問い合わせください。
11. ・給与待遇は、年俸制となります(年額の12分の1を月額支給)。
・国立天文台は男女雇用機会均等法を遵守し、男女共同参画社会の実現に向けた取り組みを進めており、業績の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用します。詳しくは<http://open-info.nao.ac.jp/danjokyodo/>をご覧ください。

国立天文台研究教育職員(チリ観測所助教、チリ勤務)

1. 助教1名
2. (1) 国立天文台チリ観測所 (2) チリ共和国サンティアゴ市
3. 電波天文学
4. 本助教の公募では、チリの合同ALMA観測所の国際職員として、ALMA望遠鏡システム評価や科学評価を分担するとともに、効率的な国際ALMA観測所の運用と保守を実現させることや、観測所の科学運用(観測スケジューリング、観測の実行、観測データの解析と品質管理、システム品質保証、キャリアレーションの実行、当番天文学者、プロポーザルの技術審査などを含む)の一部に貢献する能力と意欲をもった方を求めます。これらの職務と並行して、ALMAを用いた自身の

科学研究を推進していただきます。

Face-to-face会議やビデオ会議、電話会議等での科学的・技術的議論ができる英語力は必須です。

5. (1) 決定後なるべく早い時期、(2) なし(定年65歳)。ただし、採用5年目に行われる業績評価の結果によっては他の職種に移っていただく可能性があります。
6. 関連分野で博士の学位を有するか、またはそれと同等とみなせる方
7. 以下の書類(英文)をpdfファイルとし、電子メールに添付して送付してください。(1) カバーレター、(2) 履歴書(研究歴も含める: 個人としての研究業績のほか、多人数で行った研究・開発プロジェクトの場合は本人が果たした業績を具体的に記入してください)、(3) 研究論文リスト(査読論文とそれを区別し、共著の場合は本人の役割分担を記すこと)、(4) 主要論文3編のpdfコピー、(5) 職務に対する抱負と計画、(6) できるだけ迅速に連絡がとれる連絡先(e-mailアドレス、電話番号)、(7) reference letter 2通以上(応募者からの書類に含めず、letterを依頼した方から直接9.(1)の提出先に応募締切までに届くよう依頼してください)。
8. 2016年2月4日(木)17時(日本時間)必着
9. (1) e-mail(応募専用): apply-alma-assis20160204_AT_nao.ac.jp (_AT_を@で置き換える)メールのSubject欄に”application for Assistant Professor of NAOJ Chile Observatory”と明記してください。
(2) 国立天文台チリ観測所長長谷川哲夫
e-mail: tetsuo.hasegawa_AT_nao.ac.jp (_AT_を@で置き換える)
メールのSubject欄に”question on Assistant Professor of NAOJ Chile Observatory”と明記してください。
10. ・すべての応募書類(上記7.の(1)-(7))はそれぞれpdfファイルに変換し、メールに添付すること。
・pdfファイル作成にあたっては解像度に注意し、あまり容量が大きくなりすぎないようにしてください(メール一通最大10MB程度まで)。
・郵送や直接持参による応募は受け付けません。
・応募書類は本件の選考以外のいかなる目的にも使用しません。
・応募書類が受理されると祝休日を除き3日以内に受理確認のメールをお送りします。それが届かない場合には、apply-alma-assis20160204_

AT_ nao.ac.jpへ(AT_を@で置き換える)お問い合わせください。

11. 給与待遇は、年俸制となります(年額の12分の1を月額支給)。
- ・国立天文台は男女雇用機会均等法を遵守し、男女共同参画社会の実現に向けた取り組みを進めており、業績の評価において同等と認められた場合には、女性を積極的に採用します。詳しくは<http://open-info.nao.ac.jp/danjokiyodo/>をご覧ください。

人事公募結果

1. 掲載号
2. 結果(前所属)
3. 着任時期

宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所教授

1. 2014年11月(第107巻第11号)
2. 山田亨(東北大学大学院理学研究科 教授)
3. 2016年1月1日

研究会・集会案内

日本の科学者・技術者シリーズ企画展 渋川春海没後300年「渋川春海と江戸時代の天文学者たち」

会 期: 2015年12月19日(土)~2016年3月6日(日)
 会 場: 国立科学博物館 日本館1階企画展示室
 (JR「上野駅」公園口から徒歩5分)
 主 催: 国立科学博物館
 後 援: 日本天文学会, 日本科学史学会

企画概要

今年には日本で最初の天文学者ともいわれる渋川春海(1639-1715)が亡くなって300年にあたります。渋川春海は自らの天体観測に基づいた日本で初めての独自の暦を作成し、平安時代から800年以上用いられた狂いの生じていた暦を新しくして、幕府の初代天文方に任命されました。

本展ではさまざまな努力のすえに改暦を行った渋川春海の業績、人物像とともに、その流れを継ぐ江戸時代中後期の天文学者たちについて紹介します。

展示構成

1. 渋川春海とその時代

1.1 天文学者 渋川春海

江戸時代以前の日本は、中国の天文学を基本としていました。渋川春海は夜空の星を実際に観測し、その上に独自の天文学を築いていきました。彼が製作した一連の星図や天球儀を見るとそのようすを知ることができます。貴重なそれらの資料をもとに彼が築いた天文学の世界を紹介します。

1.2 日本の暦と渋川春海

渋川春海が改暦に取り組むまでは、平安時代に採用された中国の暦が800年以上そのまま用いられており、長年の間に積み重なったそのずれは大きな問題となっていました。その問題の解決に挑んだのが渋川春海であり、彼が天体観測を行ったのはそのことが理由の一つでした。彼の最大の業績である日本独自の暦の作成について、その過程と併せて紹介します。

1.3 渋川春海ってどんな人?

渋川春海はもともとは基打ち(二世安井算哲)であり、神道や朱子学も深く学んでいました。その関係から保科正之、徳川光圀といった人々との親交が生まれ、改暦の事業にも大きな力となりました。ここでは渋川春海の人物像や人間関係に焦点をあてて紹介します。

2. 天文学者 徳川吉宗

享保の改革などで有名な徳川幕府八代将軍(1684-1751)は科学技術に関心が高く、禁書令を緩和するだけでなく、天体望遠鏡や天文台を作り、自身も天体観測を行っていたことが知られています。近年発見された関連史料とともに、江戸時代に用いられていた観測機器や天文台について紹介します。

3. 高橋至時と市井の天文学者たち

江戸時代中期の市民の文化水準の高さを示す証の一つとして、大坂の天文学者たちの存在があります。公の仕事とは関係なく自らの興味から天文学を研究していた彼らは幕府に招かれ、江戸時代の天文学を大きく発展させました。有名な伊能忠敬の業績も、彼らの指導があって成し遂げられたものです。

4. 高橋景保と渋川景佑

高橋至時(1764-1804)の子、高橋景保(1785-1829)と渋川景佑(1787-1856?)の兄弟は、江戸時代の後期、蛮書和解御用を設け、西洋の天文学の知識を取り入れて、最も進化した太陰太陽暦を作りました。彼らの業績と、その後明治維新から太陽暦採用に至る

流れについて紹介します。

一般講演会を下記の日時に開催します。会場は日本館2階講堂、定員は100名です。申込み方法等、詳細は国立科学博物館ホームページ<http://www.kahaku.go.jp>を御覧ください。

2016年2月6日(土)

13:30-15:00 江戸の天文暦学者 澁川春海の学問と思想

川和田晶子(広島大学)

15:15-16:15 西洋天文学の流入と幕府天文方

嘉数次人(大阪市立科学館)

大佛次郎記念館 野尻抱影生誕130年記念展覧会および講演会のお知らせ

(公財)横浜市芸術文化振興財団

大佛次郎記念館

大佛次郎記念館では、「星の文人」野尻抱影(1885-1977)生誕130年を記念し、「星の抱影と弟・大佛次郎」展を開催します。独自のスタイルで星の美を語り続けた野尻抱影。弟・大佛次郎との兄弟関係を初公開の書簡から読み解くほか、全国に天文ファンの裾野を拡げ、多くの子どもたちにも影響を与えた生涯と業績を紹介します。さらに、冥王星という和名の考案者であることにちなみ、冥王星発見からニュー・ホライズンズによる惑星探査の最新情報を、海部宣男国立天文台名誉教授執筆によるパネルで紹介いたします。

また、関連企画として海部宣男氏を講師に招き「日本人の星と宇宙 野尻抱影生誕130年」と題する講演会を実施します。みなさまのご来場をお待ちしています。

1. 会期: 2015年11月12日(木)-2016年3月13日(日)
2. 会場: 大佛次郎記念館2階ギャラリー
(〒231-0862横浜市中区山手町113)
(最寄駅みなとみらい線 元町・中華街駅6番出口から徒歩8分)
3. 講演会: 「日本人の星と宇宙 野尻抱影生誕130年」
講師: 海部宣男(国立天文台名誉教授・国際天文学連合(IAU)顧問)
4. 講演会日時: 2016年1月16日(土) 13:30-15:00
5. 講演会会場: 横浜人形の家4階「あかいくつ劇場」
(〒231-0023横浜市中区山下町18)
(最寄駅みなとみらい線 元町・中華街駅4番出口から徒歩約3分)

6. 定員: 130名(2015年11月1日より受付開始、先着順。定員になり次第応募終了します)
7. 参加費: 大人500円(大佛次郎記念館への入館料込み)
小・中学生無料(応募申込みは必要です)
8. 応募方法: ①氏名(ふりがな) ②住所 ③電話番号と「星の講演会 1/16」係を明記のうえ、次のいずれかの方法でお申込みください。
a. 大佛次郎記念館 窓口
b. FAX: 045-622-5071
c. e-メール: osaragi-oubo@yaf.or.jp(応募専用)
9. 問合せ先 TEL: 045-622-5002
FAX: 045-622-5071

大佛次郎記念館ホームページ<http://osaragi.yaf.jp.org>(応募状況はホームページでお知らせします。)

名古屋大学大学院理学研究科・名古屋市科学館共催

第14回 坂田・早川記念レクチャー

「平安の陰陽師が見た宇宙線加速源」

小山勝二氏(京都大学名誉教授)

平成27年12月20日(日)

開場13:30 開始14:00 終了予定16:30

名古屋市科学館 サイエンスホール

■対象: 高校生以上

■定員: 300名(申し込み制、多数の場合は抽選)

参加には科学館の観覧料が必要です。(高校生・大学生200円, 大人400円)

■講演会ホームページ: <http://www.phys.nagoya-u.ac.jp/SakataHayakawa/index.html>

申し込み方法: 講演会ウェブサイトの専用フォームからお申し込みください。

(個人情報、本セミナーの運営に必要な範囲でのみ使用します)

申し込み締め切り: 12月4日(金)

内容についてのお問い合わせ

名古屋大学大学院理学研究科A研 担当: 立原

TEL: 052-789-2839

E-mail: sakata-hayakawa2015@a.phys.nagoya-u.ac.jp

申込方法、会場に関するお問い合わせ

名古屋市科学館 担当: 天文係 中島

TEL: 052-201-4486(代)

注: 高校などでまとまって参加希望される場合は、お問い合わせ下さい。

会務案内

日本天文学会 2015 年秋季年会報告

2015年秋季年会は、9月9日(水)から11日(金)の3日間、甲南大学岡本キャンパス(兵庫県)にて口頭講演会場9、ポスター会場12を使って開催された。講演件数は口頭講演が422件、ポスター講演が215件で、合計637件の講演があった。年会参加者は895名であった。また、以下に報告するように、通常セッションに加え教育フォーラム、特別セッション1件、企画セッション2件、ジュニアセッションも開催された。開催地理事の須佐元氏や甲南大学の皆さんのご尽力により、順調に進行した。

座長は次の49名の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表す。(敬称略)

	9月9日(水)		9月10日(木)		9月11日(金)	
	11:00-13:00	15:00-17:00	09:30-11:30	13:30-15:30	09:30-11:30	13:30-15:30
A会場	恒星 菅原泰晴 (中央大学)	恒星 青木和光 (国立天文台)	星・惑星 梅村雅之 (筑波大学)	星・惑星 廣田朋也 (国立天文台)	星・惑星 細川隆史 (東京大学)	
B会場	教育・他 縣秀彦 (国立天文台)	教育・他/星・惑星 成田憲保 (ABC)	星・惑星 小久保英一郎 (国立天文台)	星・惑星 小林浩 (名古屋大学)	星・惑星 中本泰史 (東京工業大学)	
C会場	宇宙論 山崎大 (茨城大学)	太陽 清水敏文 (ISAS/JAXA)	太陽 堀田英之 (千葉大学)	太陽 新田伸也 (筑波技術大学)	太陽 勝川行雄 (国立天文台)	
D会場	高密度星 大野雅功 (広島大学)	高密度星 雁野重之 (九州産業大学)	高密度星 根來均 (日本大学)	高密度星 河内朋子 (東海大学)	高密度星 柴田晋平 (山形大学)	
E会場	太陽系/銀河形成 三澤透 (信州大学)	銀河形成 長島雅裕 (文教大学)	銀河形成 竹内努 (名古屋大学)	銀河形成 本原顕太郎 (東京大学)	銀河形成 矢部清人 (東京大学)	
F会場	銀河団 藤田裕 (大阪大学)	銀河核 海老沢研 (ISAS/JAXA)	銀河核 深沢泰司 (広島大学)	星間現象 酒向重行 (東京大学)	星間現象 鳥居和史 (名古屋大学)	星間現象 西山正吾 (宮城教育大学)
G会場	CTA 萩尾彰一 (大阪市立大学)	CTA 田中孝明 (京都大学)	超新星爆発 須田拓馬 (東京大学)	超新星爆発 梅田秀之 (東京大学)	SKA 高橋慶太郎 (熊本大学)	SKA 市来浄興 (名古屋大学)
H会場	銀河 伊王野大介 (国立天文台)	銀河 村岡和幸 (大阪府立大学)	銀河/観測機器 大屋真 (国立天文台)	観測機器 小宮山裕 (国立天文台)	観測機器 村上尚史 (北海道大学)	観測機器 小谷隆行 (国立天文台)
I会場	観測機器 亀野誠二 (国立天文台)	観測機器 田村陽一 (東京大学)	観測機器 春日隆 (法政大学)	観測機器 辻本匡弘 (ISAS/JAXA)	観測機器 山田真也 (首都大学東京)	観測機器 高橋弘充 (広島大学)

〈記者会見〉

日本天文学会秋季年会記者会見は、年会の前日、9月8日（火）14:00から甲南大学にて行われた。市川隆日本天文学会会長からの挨拶、秋季年会概要、特別セッション、公開講演会等の紹介の後、2件の年会研究講演について発表を行った。報道機関5社の参加があった。以下の研究発表1)が毎日新聞、愛媛新聞、神戸新聞、共同通信、時事通信等の数社以上に掲載された。また、以下の研究発表2)に関連して「宇宙をみる眼」美術展（志賀高原ロマン美術館）がNHK Eテレテレビ番組に、公開講演会が神戸新聞、テレビニュースでそれぞれ取り上げられた。なお年会期間中には、天文教育フォーラムに日経新聞社の参加・取材があったことを付記しておく。

記者発表された年会研究講演:

- 1) 「突然、星を作らなくなった銀河の発見—100億年前、銀河に何が起こったのか?—」
谷口義明氏、小林正和氏、鍛冶澤賢氏、長尾透氏（愛媛大学）ほか
関連講演番号: X45a
- 2) 「天文学とアートとのコラボレーション最前線」
大西浩次氏（長野工業高等専門学校）、鈴木幸野氏（志賀高原ロマン美術館）、衣笠健三氏（国立天文台野辺山宇宙電波観測所）ほか
関連講演番号: Y11c, Y10c, Y09b
(望月優子)

〈特別セッション〉

【特別セッション: SKA計画の概要とSKAが拓く天文学】

SKA特別セッションは2015年9月11日（金）の15:35-17:00の時間でG会場で開催した。最初にSKA機構長のPhilip Diamond氏よりSKA計画の概要、目指すサイエンス、進捗状況、資金計画、運用方針などの説明があった。SKA計画の恒久オフィスがイギリスのジョドレルバンクのマンチェスター大学敷地内に設置されることを決定したこと、予算の上限が設けられ、現在デザインの改訂を行いつつありもうすぐ公開できること、2018年には最初の観測を建設を進めながら始める予定であることが報告された。また、運用の方針として、主要な科学目標に関する観測に加わるには、メンバー国所属である必要があることが明確に示され、また現在メンバー国ではない日本に対しては、機構長の個人的な見解として予算の寄与を含めてメンバー国としての参加を期待していることなどが話題として挙げられた。

次に、SKA-JPコンソーシアムの代表である杉山直氏（名古屋大学）より日本の貢献が期待できるサイエンスについて発表があった。SKA-JPコンソーシアムでは宇宙再電離、パルサーと重力理論、宇宙磁場、宇宙論、銀河進化、星間物質、アストロメトリの七つのサイエンスワーキンググループを組織し活動を進めており、そのSKA計画に関係した研究成果や、準備研究の進捗などについての講演が行われた。また、日本のSKA参加へ向けての資金獲得の活動状況やその戦略、さらには日本学術会議でのSKA計画の立ち位置などについて具体的な報告があった。日本の電波および天文コミュニティにSKA計画の重要性をアピールするという目的から、杉山氏の講演は日本語で行ったが、質疑応答については英語を用いた。最後の議論の時間には、海外からの参加者より「日本の電波コミュニティは世界で見ても非常に大きいのに、なぜSKAに加わっていないのか」といった素朴な疑問が上がった。SKAへの熱い期待をもつ理論研究者と、慎重な立場の電波観測研究者が意見を交わしあった。またSKAという略語は日本では目立たないので、日本人向けの標語を考えてはどうかといった指摘があがった。年会最終日の最終スロットにもかかわらず100名を超える参加者があり、日本の天文コミュニティ内にSKA計画への大きな期待と興味が広がっていることが感じられるセッションとなった。

(市来浄興)

〈企画セッション〉

【ガンマ線天文台CTAで切り拓く次世代の高エネルギー天文学】

次世代のガンマ線天文台Cerenkov Telescope Array (CTA)計画は、数十台の地上大気チェレンコフ望遠鏡アレイを北半球と南半球にそれぞれ設置することで、TeVガンマ線領域で従来と比較して1桁良い感度を達成し、多くの新天体や新現象の発見を目指している。本セッションは、多波長電磁波や宇宙線・ニュートリノ・重力波などのさまざまな観測と理論の研究者とともに、フェルミ衛星で得られたガンマ線天文学の知見を総括し、CTAによって何がもたらされるかを検討し、今後の戦略を練ることを目的として開催された。4件の基調講演に加え、13件の口頭講演、6件のCTA開発研究についてのポスター講演（口頭発表なし）の申込みがあり、年会1日目の午前と午後のセッション（G会場）にそれぞれ80-90名の参加があった。全体を通して活発な議論が行われた。

午前の基調講演では、窪秀利氏（京都大）によるCTA計画の紹介とTeVガンマ線天文学のレビューの

後に、福井康雄氏(名大)によって、TeVガンマ線天体の理解において、電波による星間物質の精密観測が重要であることがレビューされた。それに続いて、X線や電波観測によるTeVガンマ線超新星残骸の研究についての一般講演が多数あった。また、かに星雲のガンマ線フレア、ガンマ線バーストなどの突発現象を理解するためのCTAによる研究計画が紹介された。午後の基調講演では、高原文郎氏(大阪大)が宇宙線の起源と相対論的ジェットの問題に関する今後の展望について示唆に富んだ議論を行い、Daniel Mazin氏(東京大)が遠方の活動銀河核の系統的なガンマ線観測によって得られた宇宙背景放射光の制限について、レビューを行った。それに続き、活動銀河核のフレア時のガンマ線時間変動、ニュートリノ観測や最高エネルギー宇宙観測などの一般講演があった。CTA天文台によって、高エネルギー天体のさらなる多波長・多粒子観測が押し進められ、高エネルギー天文学の新たな地平が切り拓かれることを期待したい。

(吉田龍生)

【SKA計画の概要とSKAが拓く天文学】

SKA企画セッションを2015年9月11日(金)の9:30-11:30にG会場で開催した。このセッションは三つの招待講演から成り立っており、3人の講演者Peter Dewdney氏(SKA機構)、Rachel Webster氏(メルボルン大学)、Evan Keane氏(SKA機構)はいずれもSKAもしくはその試験機に密接にかかわっている人たちである。3氏には日本で特に関心のあるテーマについて30分+10分という時間をとって講演していただき議論をした。

最初の講演者Peter Dewdney氏は“Engineering Challenges in SKA1 and SKA2”というタイトルでSKAに関する技術開発について講演を行った。SKAの技術開発はwork package consortiumという組織を軸にしており、work packageには“Assembly, Integration and Verification,” “Central Signal Processor (CSP),” “Dish,” “Infrastructure Australia and Africa,” “Low-Frequency Aperture Array,” “Mid-Frequency Aperture Array,” “Signal and Data Transport,” “Science Data Processor,” “Telescope Manager,” “Wideband Single Pixel Feeds”があること、そしてそれぞれの開発項目についての説明があった。2番目の講演者Rachel Webster氏は“The MWA Epoch of Re-ionisation Experiment”というタイトルでSKA試験機の一つであるMurchison Widefield Array (MWA)による宇宙再電離期中性水素21 cm線の観測の現状と課題について講演した。講演の後は前景放射や電離圏によるシス

テマティックスなどについての議論があった。最後の講演者Evan Keane氏は“Studying Gravity with Pulsars and the SKA”というタイトルでパルサータイミングによる重力波の直接検出と一般相対論の検証について講演した。SKAで観測する膨大な数のパルサーのデータをどう処理するかが課題であることが強調された。

SKAは2020年代の天文学を牽引する大型望遠鏡であり、日本での関心も高まっている。このセッションを機会により広いコミュニティの関心が集まり、日本でもSKAを推進していくことが望まれる。

(高橋慶太郎)

〈天文教育フォーラム〉

今期から日本天文学会にキャリア支援委員会が立ち上がった。そこで、日本天文学会の教育委員会、男女共同参画委員会、キャリア支援委員会の3委員会と天文教育普及研究会が共催し、日本学術会議物理学委員会IAU分科会の後援で、2015年9月9日(水) 17:15より18:45までA会場において『天文学会員のためのキャリア支援を考える』と題した教育フォーラムを開催した。参加者数は約110名であった。

今回の教育フォーラムでは、学会員が抱えるキャリア形成やキャリア支援に関する課題や要望、それに対する支援に関して意見を広く募ることを目的としており、従来の教育フォーラムの形式とは大きく異なった。初めに、キャリア支援委員会委員長でもある日本天文学会会長の市川隆さんから挨拶があり、その後、宇宙航空研究開発機構の近藤恵介さんより若手の会を代表して問題提起をしていただいた。若手の会ではフォーラムに先立ってアンケートを実施し、そこから就職活動に対する教員の理解や配慮不足の点、ポストドク期間の希望と現実の不一致の点などが挙げられた。また、研究者以外の方面におけるロールモデル提示の要望も出された。

次に、テーマ別に5-10人の小グループに分かれグループ討論を行った。テーマ1「大学院生の研究活動と就職活動の両立」に関してでは、教員側に対して変化する就職活動期間の把握と研究室の卒業生の進路状況を把握し連絡可能な状態にすることなどの要望が出された。テーマ2「アカデミックポジションへの就職」では、新設の研究室もあるため、一般性のある情報提供などが学会に求められた。テーマ3「科学館や社会教育施設への就職」では、博士号取得者の雇用促進、天文学会に情報収集の窓口になってもらいたいとの要望が挙げられた。テーマ4「自由テーマ」では、若手育成に責任ある立場の人が、天文分野の人材の優

れた能力に関して行政や企業、社会にアピールしていく必要があることなどが挙げられた。最後に「キャリア支援委員会に今後何を求めるのか」と題した全体討論では、天文で身につけた技術や能力、対応力は研究者の世界に限らずさまざまな世界で通用することができる。そのため、就職活動を行っている学会員には視野を広げて就職活動をするとうまいなどの意見が出された。

今回のフォーラムではグループ討論形式を採用した。その結果、多くの有益な意見やアイデアをいただくことができた。これらの意見はフォーラム後に分析され、キャリア支援委員会の今後の活動に役立てていくことになる。若手からみえるキャリアの問題には、男女共同参画委員会や天文教育委員会に関係するものがある。これが3委員会合同でフォーラムを開催した理由である。委員会が今後どのような活動をしていくべきかについて、今回のフォーラム結果から検討していきたい。

(大山真満)

〈懇親会〉

年會2日目にあたる9月10日(金) 17:30から懇親会が開催された。会場は甲南大学岡本キャンパス内にあるカフェ・パンセである。収容定員250名のカフェであるが、外のテラスを開放して総勢292名の参加者を収容した。内訳は一般190名、学生102名で、このうち当日申込みは一般25名、学生11名であった。また年會開催にご尽力いただいた一般10名、学生27名を招待客とした。

宴は年會開催地理事の須佐の司会進行で始まり、杉村陽甲南大学副学長より歓迎のご挨拶をいただくとともに、理工学部物理学の歴史をご披露いただいた。続いて市川隆日本天文学会会長と杉村副学長によって鏡割りが行われ、市川会長のご挨拶・乾杯となった。乾杯には年會の文字と甲南大のロゴの入った八尺升が用いられた。この升は希望者持ちかえりとなっている。宴で供された日本酒は、甲南大学岡本キャンパスから少し海側に下ったところにある、酒造「神戸酒心館」の「福寿」であった。これはノーベル賞の晩餐会でも用いられたものでたいへん好評であった。料理は甲南大学生協によって供された。明石の漁協から魚を仕入れるなど努力していただき、こちらも好評であった。また外のテラスでは三田の農家の方をお願いして鉄板で肉を焼いていただき、長蛇の列ができるほどの大好評であった。総じて参加者には神戸の食を大いに楽しんでいただいたようである。19:00頃に次回開催地である首都大学の政井邦昭開催地理事か

らご挨拶があり、20:00頃に散会となった。なお今回の懇親会の開催にあたっては甲南大学より多大な援助をいただいたことを付記し、そのことに対し謝意を表す。

(須佐元)

〈保育室〉

甲南大学・岡本キャンパス内の講義室にて保育室を開設した。3家族3名の利用があった。準備にあたり、甲南大学のスタッフの方々にご協力いただいたことを感謝する。

(中道晶香, 石川遼子)

〈ジュニアセッション〉

ポスター講演のみを募集し、2件の発表があった。内容は、銀河団、位置天文学の各1件であった。それぞれ、自らの観測結果を解析したもので、いずれも力作であった。特に均時差の原因を追求した塩尻市立丘中学校科学部の発表は2年以上の継続的な観測から、ケプラーの第2法則に相当する関係まで導くものであった。各ポスターへのコメントを収集し、発表者に送付した。コメントをいただいた研究者の方々へ感謝する。また、ポスター会場をご準備いただいた開催地の方々へ感謝する。

(大西浩次)

〈公開講演会〉

年會最終日の翌日9/12(土) 13:00-16:30に、甲南大学岡本キャンパスにある甲友会館において公開講演会「元素の起源」が行われた。内容は、これまでに明らかとなった物質としての人類の起源について、3人の講師の方に一般向けにわかりやすく語っていただくというものである。

講師は甲南大学物理学の宇都宮弘章氏(原子核物理学)、国立天文台の田中雅臣氏(超新星爆発)、筑波大学計算科学研究センターの梅村雅之氏(天体形成・計算科学)であった。

聴衆は90名、学生から一般まで幅広い年齢層の参加者があった。講演会は山岡均教育担当理事の司会で進行し、最初に市川隆日本天文学会会長、つづいて杉村陽甲南大学副学長からの挨拶があり、宇都宮氏の話となった。氏は原子核物理学の専門家であるが、デモクリトスの原子論の話から説き起こし、わかりやすく「元素とは何か」についてお話しいただいた。つづいて田中氏の講演では「元素が生まれる時」と題して、星や超新星といった天体現象の中で元素が合成されるという話を、たいへんわかりやすく語っていただ

いた。両氏の話とも好評で多くの質問があった。休憩をはさんで梅村氏の講演となった。梅村氏は元素が星の生死とともに宇宙をめぐる地球にやってきたという「元素はめぐる」という話に加えて、アミノ酸と天体現象の関係についての最新の興味深い研究についても語っていただいた。氏の講演にも甲南大の生物学科の専門家も含めて多くの質問があった。

最後に3氏が登壇し、再び多くの質問を受け付け、盛会のうちに終了となった。本講演会も、年会同様に甲南大学の後援を受けて行われたことを付記しておく。

(須佐元)

(年会実行委員長: 佐藤文衛)

公益社団法人日本天文学会へ2015年6月1日～2015年8月31日に入会承認された方、移籍された方、退会された方をお知らせします。

正会員入会 (80名)

森昇志	東京工業大・大学院理 (在学)	毛利清	東京大・大学院理 (在学)
岡村拓	東京大・大学院理 (在学)	加納龍一	東京大・大学院理 (在学)
村上琴音	鹿児島大・大学院理工 (在学)	潮田和俊	埼玉大・大学院教育 (在学)
岩村宏明	名古屋大・大学院理 (在学)	折橋将司	大阪教育大・大学院教育 (在学)
永野将之	鹿児島大・大学院理工 (在学)	佐野圭	JAXA/東京大・大学院理 (在学)
奥田和史	東京大・大学院理 (在学)	小汐由介	岡山大・理・物理
古賀真沙子	名古屋大・大学院理 (在学)	西本英里菜	大阪教育大・大学院教育 (在学)
細谷謙介	兵庫県立大・西はりま天文台 (在学)	富田沙羅	青山学院大・大学院理工 (在学)
永田竜	高エネルギー加速器研究機構・素粒子原子核研究所	野上雅弘	青山学院大・大学院理工 (在学)
増山美優	東京大・大学院理 (在学)	川崎光太	愛媛大・大学院理工 (在学)
岸田望美	北海道大・大学院理 (在学)	和田有希	東京大・大学院理 (在学)
高橋諒	大阪府立大・大学院理 (在学)	玉澤晃希	東京理科大・大学院理工 (在学)
井上将徳	大阪府立大・大学院理 (在学)	吉野祐馬	東京理科大・大学院理工 (在学)
保田悠紀	北海道大・大学院理	永吉勤	埼玉大・大学院理工 (在学)
早川朝康	京都大・大学院理 (在学)	丹野憧磨	東京理科大・大学院理 (在学)
柳谷和希	大阪府立大・大学院理 (在学)	小野雄貴	東京工業大・大学院理工 (在学)
米谷拓朗	茨城大・大学院理工 (在学)	荒木惟	福岡大・大学院理 (在学)
田中佑希	名古屋大・大学院理 (在学)	菅原悠馬	東京大・大学院理 (在学)
大坪翔悟	神山天文台/京都産業大・大学院理 (在学)	Kim Juyong	大阪大・大学院理 (在学)
熊本淳	東北大・大学院理 (在学)	大浜晶生	名古屋大・大学院理
杉本樹梨	立教大・大学院理 (在学)	森貴宏	東京農工大・大学院工 (在学)
岩本直己	茨城大・大学院理工 (在学)	仲谷峻平	東京大・大学院理 (在学)
幅田翔	広島大・大学院理 (在学)	藤原太智	東京工業大・大学院理工 (在学)
岡田千穂	広島大・大学院理 (在学)	大内遙河	東京工業大・大学院理工 (在学)
志岐健成	広島大・大学院理 (在学)	小島崇史	東京大・大学院理 (在学)
寺前拓人	広島大・大学院理 (在学)	和田健太郎	東京大・大学院理 (在学)
加藤友梨	茨城大・大学院理工 (在学)	野田和弘	東京大・大学院理 (在学)
大橋礼恵	広島大・大学院理 (在学)	高橋宏明	電気通信大・情報・通信工学 (在学)
寺本篤史	鹿児島大・大学院理工 (在学)	向江志朗	東京大・宇宙線研究所 (在学)
高橋葵	JAXA・宇宙科学研究所 (在学)	原千穂美	国立天文台/東京大・大学院理 (在学)
藤井善範	国立天文台 (在学)	加川保昭	金沢大・大学院自然科学 (在学)
桜井準也	国立天文台 (在学)	河合謙太郎	金沢大・大学院自然科学 (在学)
		新倉広子	東京大・大学院理 (在学)
		吉川駿	名古屋大・大学院理 (在学)

BELL, AARON CHRISTOPHER

東京大・大学院理（在学）
 加納大空 名古屋大・太陽地球環境研究所（在学）
 加地紗由美 京都産業大・大学院理（在学）
 岡田一志 東京大学・大学院理（在学）
 森岡祐貴 大阪府立大・大学院理（在学）
 池田思朗 統計数理研究所
 澤野達哉 金沢大・大学院理工

市村千晃 東京大・大学院理（在学）
 田中隆広 筑波大・大学院数理物質科学（在学）
 小島浩一 神戸大・大学院人間発達環境学（在学）
 萩野浩一 JAXA・宇宙科学研究所
 有松亘 国立天文台
 高田淳史 京都大・大学院理
 武田彩希 京都大・大学院理・物理学・宇宙物理学

準会員入会（9名）

小早川達也 東海大・大学院理（在学）
 千樹翔 東海大・大学院理（在学）
 友野弥生 東海大・大学院理（在学）
 伊東雅史 東京理科大・大学院理（在学）
 菅野祐 東京理科大・大学院理（在学）

森岡昭 東北大・大学院理・
 惑星プラズマ大気研究センター
 板東義隆
 河合一枝
 高崎宏之 アクセンチュア(株) (1名)

団体会員入会（1名）

宇宙システム開発(株)

正会員退会（2名）

片倉翔 吉田正太郎

編集委員会より

2016年表紙デザイン決定！

応募作品の中から編集委員会で選考の結果、Eskasさんのデザインに決定いたしました。5年連続の採用となります。

訂正

天文月報2015年11月（第108巻第11号）のASTRO NEWS記事の735頁5行目に誤りがありました。訂正してお詫びいたします。

正) 同時校正光源法
 誤) ヨードセル法

天文月報オンライン/投稿用アップローダーのIDとパスワード

ID: asj 2005

パスワード: 雑誌コード（5桁の数字と）vol98（5文字）の計10文字を入力してください。「雑誌コード」とは印刷版の月報の裏表紙の右下に書かれている「雑誌○○○○○▲」の○○○○○の部分です。○○○○○は各号共通の数字です。

青木和光（編集長），上野悟，大栗真宗，奥村真一郎，富永望，萩原喜昭，馬場彩，平松正顕，町田正博，諸隈智貴，吉田二美
 平成27年11月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会
 印刷発行 印刷所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-8 株式会社 国際文献社
 定価720円（本体667円） 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会
 Tel: 0422-31-1359（事務所）/ 0422-31-5488（月報） Fax: 0422-31-5487 振替口座00160-1-13595
 日本天文学会のウェブサイト <http://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp
 会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会2015年（本誌掲載記事は無断転載を禁じます）